

地域包括ケアシステム◎先進事例に学ぶ①

高齡者総合ケアセンターこぶし園
(新潟県長岡市)

新潟県長岡市は、新潟県の中央部に位置し、信濃川が市内中央に流れる国内有数の豪雪地帯です。平成の大合併の結果、守門岳から日本海まで広大な市域を有するようになりました。コシヒカリを始めとする農業や日本海側の漁業のほか、機械金属関連産業が基幹産業となっています。

過去、幾多の災禍にあいながら、戊辰戦争に敗れ困窮をきわめる長岡藩に、支藩の三根山藩から見舞いの米百俵が贈られたときに、大参事・小林虎三郎は、「食えないからこそ教育を」の信念でその米を売り、国漢学校開校の資金に充てた「米百俵の精神」で立ち上がってきました。長岡のまちづくりの指針や人材教育の理念となっているまちです。

新潟県長岡市

総人口：281,411人

65歳以上人口：74,192人（26.4%）

75歳以上人口：40,501人（14.4%）

要介護（要支援）認定者数：

13,343人（65歳以上者の18.0%）

地域包括支援センター数：11か所

第5期介護保険料：5,792円



(平成25年3月現在)

社会福祉法人長岡福祉協会は、かつて定員100人だった特別養護老人ホームこぶし園にいる利用者を地域にかえすため、平成16年に内閣府が募集した構造改革特区事業で、既存施設を地域社会に分散させるサテライト方式を提案し、特別養護老人ホームをサテライト施設に分散・解体することとしました。

ポイントは、それまで自己所有でなければならなかった特別養護老人ホームの建物に対し、民間資源を活用できるようにリースを可能にし、

施設基準を緩和、職員配置において分割運営でも既存の施設運営形態と変わらない形態にした点です。旧長岡市では、長岡駅を中心とするエリアに、市と社会福祉法人長岡福祉協会が連携して、現在18か所のサポートセンターを設置しています。

利用者が戻る場所は、入所する前に生活していた場所を考慮して、次のように計画されました。

【施設分散と地域支援計画】（すべてにカフェテラスとキッズスペース）

特別養護老人ホーム こぶし園	喜多町	特養(旧) 30+	新 30	=	特養 60+	ショートステイ 7
	川崎	サテライト特養	15+		小規模多機能	25
	摂田屋	サテライト特養	20+		小規模多機能	25
		+グループホーム	9		在宅支援住宅	10
	千手	サテライト特養	20+		小規模多機能	25
	+グループホーム	18				
美沢	サテライト特養	15+		小規模多機能	25	

サポートセンター摂田屋は、味噌・醤油など醸造のまちで、比較的自営業者の人が多いエリアです。20人定員の地域密着型特別養護老人ホームのほか、グループホーム・小規模多機能型居宅介護・在宅支援型住宅のほか、24時間365日型訪問介護（サテライト）と訪問看護に、3



摂田屋カフェ

食365日型の配食サービス、地域交流スペース・カフェテラス・キッズルームなどを兼ね備えたサポートセンターです。

小規模多機

能型居宅介護事業所が地域に開かれたものとなるよう取組みを進めてきましたが、当初は地元町内会の理解を得られなかったそうです。町内の祭りの際に、事業所を休憩場所として提供したことを契機に、事業所のイベントに住民が参加するなど、地域との交流が生まれました。現在では、月1回、摂田屋カフェと称して飲み物やデザートを提供するなど、イベント以外でも立ち寄りもらえる雰囲気づくりに取り組んでいます。キッズスペースにWiiを設置し、大画面での体感ゲームを楽しみに通ってくる子どももいるそうです。

その他のサポートセンターでも、利用しやすい日時・場所づくりなど、地域住民の動向を確認するため、上映会などのイベントを行ない、トライ・アンド・エラーを繰り返しながら地域住民とのかかわりを模索するさまざまな取組みが進められています。

平成26年3月のサポートセンター喜多町の設置を契機に、特別養護老人ホームの利用者全員を地域にかえすことになりました。サポートセンター喜多町は、周囲は主に農業を営んでいた人が多く住む場所です。

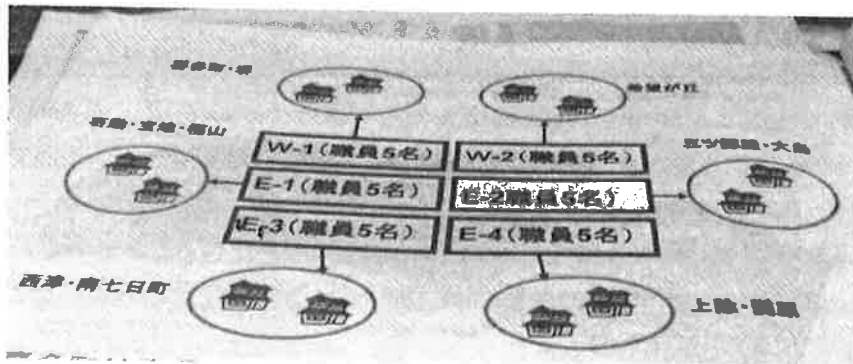
ホテルのような受付に、カフェテラスとキッズスペースも設けています。カフェテラスには、お酒と楽器が置いてあり、地域の人や来客が気軽に楽しむことができるスペースになっています。

「山奥にあったこぶし園のときよりも、気軽に母に会える」そんな声でご家族からあがります。居室には、キッチンがあり、家族が集って、みんなでお茶を飲みながら、お父さんを目の前にお寿司を食べる姿も見られるそうです。

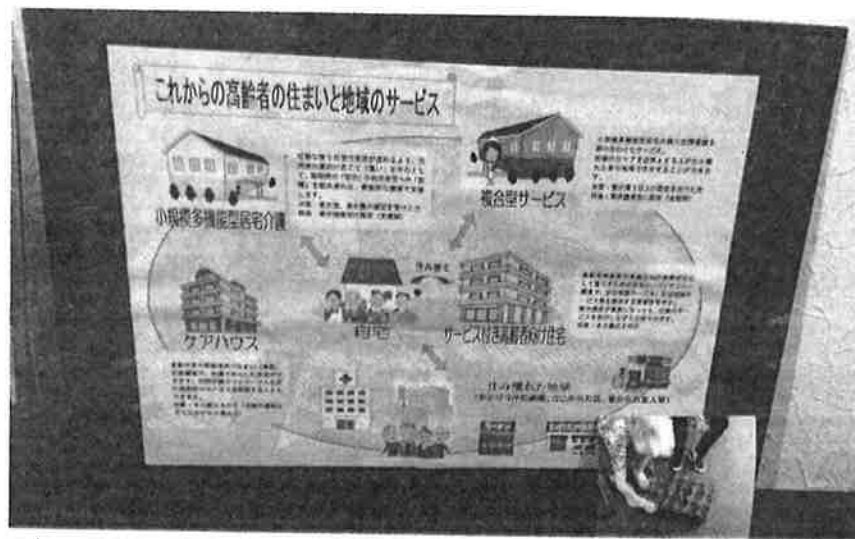
サポートセンター喜多町は、職員もコ



サポートセンター喜多町のカフェテラス



近隣に住む12名も施設の外からサポート



これからの高齢者の住まいと地域のサービス

ユニットごとにエリア担当者を決められており、定員60人の特別養護老人ホームとショートステイ7名と近隣に住む12名に対するケアを行なうセンターとして、位置づけられています。

特別養護老人ホームの建物から外へ出て、地域の人や利用者とかかわりながら、地域の居場所づくりをめざしています。